

SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS

No. 120 February 2010



グローバルCOE

◆ GCOE-SRC 冬期シンポジウム ◆

「世界のボーダースタディーズとの邂逅」開催される



2009年12月19日（土）、北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」（以下、GCOEプログラム）主催による初の国際シンポジウムがセンター内大会議室で開かれました。当日は、降り積もった雪の中、会場に用意された席がほぼ埋まるほど大勢の聴衆に集まりいただきました。

林副学長による開会の辞に続いて、岩下センター長から趣旨説明があり、GCOEプログラムが従来

地元メディアの取材を受ける海外ゲスト（総合博物館）のアカデミックな領域を超えて、社会還元をおこない国境問題の理解・解決に貢献するものであるとともに、ABS（Association for Borderlands Studies）やIBRU（International Boundaries Research Unit）、BRIT（Border Regions in Transition Conferences）等の世界の境界研究機関・組織と協力しつつ、これまであまり扱われてこなかったユーラシア地域を重点的にカヴァーし、この分野で新たなポジションを築くための野心的な試みであることが示されました。

続いて、現在のボーダースタディーズをリードする3団体の代表者による、当該分野の今日の世界的潮流について議論するラウンドテーブルが開かれました。まずABSを代表してエマニュエル・ブリュネジャイ（Emmanuel Brunet-Jailly）氏が、近年のボーダースタディーズの研究動向について、自らが編集責任を負う *Journal of Borderland Studies* 誌に最近掲載された諸論文の傾向が、なお北米地域の政治・経済中心であるものの、扱われる地域やトピックは年々多様化していることを指摘しました。次にIBRU主任のマーチン・プラット（Martin Pratt）氏は、

主に国境の画定と管理に関する実務面から、地球温暖化に伴う海面上昇によって水没の危機にさらされている島嶼地をはじめとして、気候変動による様々な障害が生じている地域で国境線の管理に困難をきたしているといった深刻な問題を実例を挙げて説明しました。最後にヨエンスー大学（フィンランド）のイルッカ・リカネン（Ilkka Liikanen）氏は、1995年のベルリン大会を皮切りにこれまで世界各地で開催されてきた国際会議 BRIT について、その各大会の特色を年代順に振り返り、冷戦構造の終焉やグローバル化の中で国境の持つ意味合いに生じてきた様々な変化が、BRIT の国際会議にも明確に反映されていることを明らかにしました。これらの報告に続いて、岩下 GCOE 拠点リーダーが、欧米の研究では重要視されていない中露国境の現況についてレポートした上で、質疑応答に入りました。会場からは、国家の势力的なレベルの違いが国境問題との間にどのような関わりを持つか、ボーダースタディーズと地域研究は相互にどのような関係にあるべきか、また、サイバースペースのようなバーチャルな空間の事象に対してボーダースタディーズはどのような貢献ができるかといった多岐にわたる質問が出され、わが国では馴染みがない当分野に対する研究者の関心の高さを伺わせました。



カムセーラ氏の報告

会場に用意された軽食をとりながら開かれたランチオン・セミナーでは、ウォータールー大学（カナダ）の原貴美恵氏が、北方領土問題が東アジア地域の歴史的な冷戦構造の中で他の領土問題と相互に関連しながら発展してきた経緯を踏まえ、多国籍間の枠組みで問題解決を図ることの重要性と、フィンランド・スウェーデン間で結ばれたオーランド諸島の管轄をめぐる協定が和解交渉の具体的なモデルになり得ることが提案されました。これに対して、北方領土に適用する際の条件の違いについて質問が寄せられました。

引き続きおこなわれた午後の部では、ダブリン大学トリニティ・カレッジのトマシュ・カムセーラ（Tomasz Kamusella）氏が、ポーランド、チェコ、スロヴァキアおよびドイツの言語文化圏の境界に位置するシレジア地方の言語状況について、歴史・社会言語学の観点から報告をおこないました。伝統的に「ポーランド語の方言」、「チェコ語の方言」さらには「ドイツ語の方言」と扱われてきたシレジアの人々の言葉は、実際にはクレオール的存在であることが指摘され、この地域の言語区分、そして人々のアイデンティティがいかに国境の変遷と直接的に関連してきたかが論じられました。本報告は、従来のスラブ研究センターの研究対象と共通するところが多く、センター関係者を中心に会場からはフィンランドとロシア、ウクライナとスロヴァキアなど他地域の諸問題が提示されるなど、「言語と境界」というテーマの普遍性と重要性が改めて確認されました。

最後のセッションでは、外務省国際法課長の岡野正敬氏が国境問題にいかに対応するかについて、実務者の立場から講演をおこない、国境問題の解決に向けた方策として、領土の有効性や法的に一貫性の他に、市民による行動も法的な意義を持ちうることを指摘しました。そして最終的には、当事者間の交渉の場を維持しながら相互信頼を醸成し、国際法に基づいて解決を図ることの重要性が強調されました。

今回の国際シンポジウムは単日開催でしたが、これと前後した GCOE 関連イベント、す

なわち樺太日露国境標石をメイン
フューチャーした北大総合博物館
第二期展示の開始（18日）、GCOE
の成果本である『日本の国境：い
かに「呪縛」を解くか』の刊行
（同）、そして開催地を根室に移し
ての対馬、与那国、小笠原、根室
各自治体首長を招いた「国境フォー
ラム IN 根室」（21日）との連携を
考慮すると、「ボーダースタディー
ズ・ウィーク」と呼びうる数日間
のイベントの一部として位置づけ
ることもできます。前述のように
本GCOEは目的に「成果の社会還



北方領土クルーズ出航（函舞）

元」を掲げていますが、実際にこれらイベントの連携とその相乗効果により、シンポジウム
当日のメディア各社の取材とこれまでのセンター国際シンポジウムとは異なる聴衆が訪れま
した。一方、これら社会還元のプロセスで、「境界・国境は動く」という境界研究の前提が、必ず
しも社会と共有されていないことが、GCOE 始動のセミナー等を通じて感じられたのも事実
です。こうした社会還元に関しても豊富な経験を有する世界の先人達から、GCOE は学べ
べきところがあるように感じられました。本国際シンポジウムにおける「邂逅」から得られた
ものを、さらにどのように発展させて社会還元と学術貢献を進めていくかが、今後の課題と
なります。[藤森]

新学術領域研究

◆ 2009 年度冬期国際シンポジウム ◆ 「ユーラシア地域大国の政治比較」開催される

12月12日（土）、13日（日）に、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の第
2回国際シンポジウムが、法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎にて開催されました。本シン
ポジウムは、政治班（第2班）を中心に組織されたものです。全体のテーマは「ユーラシア
地域大国の政治比較：中国、ロシア、インド、トルコ」で、グローバル化、自由化、情報化
などを背景として、地域大国における政治変化のダイナミズム、体制移行の実態、地方のガ
バナンスを明らかにし、同時に地域大国の政治比較の方法論を模索するものでした。基調講
演とラウンドテーブルからなるパネル・ディスカッションと、三つのセッションが用意され
ました。

基調講演では、3人の講演者が、ソ連およびロシア、中国、インドの経験を中心として、
各地域大国の比較の視点を軸に講演をおこないました。その中では、政治および経済の両面
から体制変容がどのようにおこなわれたか、またとくに、インド経済の著しい発展が開発経
済学にいかなるインパクトを与えようとしているかについて、実態的な分析がなされました。
これを受けたラウンドテーブルでは、地域大国の比較研究は何を目指すのか、いかなる手法
で比較研究をおこなうか、様々なフィールドやディシプリンをもつ地域研究者が、共同作業



セッションのようす

においていかに連携をおこなうかといった、方法論的・実践的問題について、議論がなされました。その結果、この比較によって問題を集約的に捉える事が可能となり、さらには各国固有の特徴が導き出されるということ、また地域研究者は各国研究に閉じこもるのではなく、徹底的な比較検討による知的作業をおこなう事が必要であることが確認されました。

第1セッション「近代化と民主主義のためのサブナショナルな単

位：ロシア、中国、インドの村社会とNGO」では、地域の民主主義とキリスト教の影響との関係に関する印露の比較分析、村のガバナンス、自治と公共財に関する中露比較研究、土地収用問題を例に、社会紛争の解決方法に関する中印の比較分析がおこなわれました。報告では、豊富な統計データ、現地調査、事例研究に基づく成果の発表が注目されました。

一方、宗教ほど政治的なものはないとも言えるでしょう。中国の新疆問題やロシアのチェチェン問題をはじめ、インドにおけるヒンズー教とその他の宗教の闘争、そしてトルコにおけるイスラーム主義の高揚など、地域大国の今後を占う上で宗教政治は重要な試金石となっています。第2セッション「偉大さへの鍵：地域大国の宗教政治」では、宗教・文化の違い、特にキリスト教とアジア的価値は、人権の捉え方にいかなる影響を与えているか、またトルコ・ロシア・中国はイスラーム寺院およびイスラーム組織をどのように管理しているかについての報告がなされたほか、南アジア地域における民族・宗教紛争と外交政策を中心とする比較分析がおこなわれました。

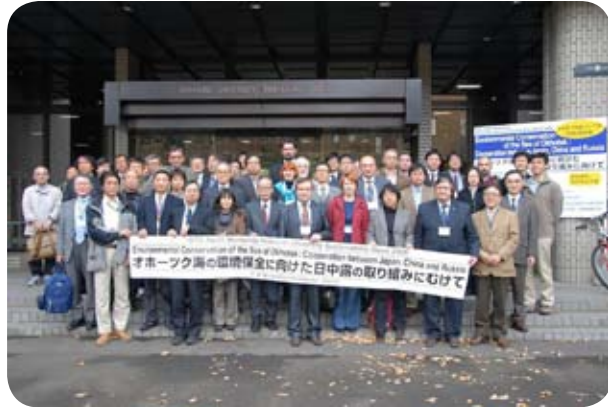
地域大国は経済開発を進め、国民の生活は底上げの形で改善されつつありますが、開発の成果は必ずしも平等に配分されているとは言えません。第3セッション「社会階層の再編と社会的亀裂」で、ヴァムシ報告は、豊富な統計データをもとに経済格差に関する中印の共通点と相違点を明らかにしました。続く林報告は、ロシア中間層の構成と価値観の多様性を中心に分析しながら、中国の中間層との比較を試みるものでした。園田報告は、アジアバロメータ等の調査データを中心に、中国、インド、ロシアの人々が階層間の格差をどのように認識しているか、それぞれどこがどう違うかについて、比較分析をおこないました。

本シンポジウムは、終始「比較」の視点に貫かれた、大胆かつ意欲的な試みでした。その結果、各地域大国の個別性が浮き彫りにされると同時に、これらに共通する普遍的特性の抽出に向けて、一歩迫る事が出来たように思えます。加えて二日間で国内外を問わず約150名の参加者が集まり、登壇者との間で活発な議論が交わされ、盛況のうちに閉会の運びとなりました。日本経済新聞、北海道新聞は13日に初日の講演、取材をベースにして報道記事を掲載しました。中国の有力なニュースサイトも、中国の新華社の配信記事を掲載しました。諸報告および議論の内容は新学術領域のディスカッション・ペーパー『比較地域大国論集』などの形で出版を予定しています。ここで得られた貴重な知見は、今後本プロジェクトを進める上で大きな財産となることを確信しています。[組織委員長・唐亮]

研究の最前線

◆ アムール・オホーツクコンソーシアムの設立 ◆

11月7～8日に、北海道大学「サステナビリティ・ウィーク2009」の一環として、国際シンポジウム「オホーツク海的环境保全に向けた日中露の取り組みにむけて」が開催されました。このシンポジウムは、北海道大学低温科学研究所環オホーツク観測研究センターを中心に、スラブ研究センターなど、いくつかの機関の協力によって組織されたものです^(注1)。オホーツク海的环境保全に関する国際会議は、2006年頃から日ロ、日中などの枠



会場の前に参加者集合

組みで様々な形で開かれてきました^(注2)。今回は、ロシアと中国から多くの研究者が参加して、真に3カ国の国際シンポになったことが最大の特徴でした。そして、このシンポジウムでの議論を受けて、シンポジウムの最後に出された共同声明^(注3)により、将来のアムール・オホーツク地域の持続可能性をより深く議論するための国際的な科学者ネットワークとして、「アムール・オホーツクコンソーシアム」が設立されたことが最大の収穫でした。

シンポジウムでは、これまでの低温科学研究所、総合地球環境学研究所などでおこなわれた研究成果に基づき、漁業の生産性を考えると、オホーツク海が太平洋にとって心臓の役割を果たしていることが示され、さらに、そのオホーツク海にとってアムール川からの流入が極めて重要な機能を果たしていることが示されました。オホーツク海とアムール川の関係は「巨大魚付林」と呼ぶべきものであり、1つのシステムとして守られるべきものであることがいくつかの報告で強調されました。

シンポジウムでは、このような研究や調査が日ロ、中ロ、日中の中で近年著しく進展していること、とくに、冷戦が終結し、中ロの国境問題が解決したことが契機となっていることなども示されました。上記のコンソーシアムの設立もこのような国際関係の改善に負うところが大きいと言えます。

採択された「オホーツク海とその周辺地域的环境保全にむけた研究者による共同声明」には、コンソーシアムの会合を2年に一度開催し、意見交換をおこなうこと、今回の会合を第1回の会合と位置づけ、第2回の会合を2011年に札幌で開催することが盛り込まれました。また、暫定的な事務局を低温科学研究所環オホーツク観測センターに置き、暫定的な参加国幹事を江淵直人氏（低温科学研究所）、ピョートル・バクラノフ氏（ロシア科学アカデミー極東支部太平洋地理学研究所）、笈志剛氏（黒龍江省社会科学院東北アジア研究所）とすることも盛り込まれました。環オホーツク海的环境保全に関する研究の進展において歴史的な意義を有する国際会議になったと思われます。[田畑]

注1) このほかの主催者は、総合地球環境学研究所、北見工業大学未利用エネルギー研究センター、国土交通省北海道開発局、国際科学技術センター、北海道大学「持続可能な開発」国際戦略本部。共催は文部科学省。

注2) これまでにおこなわれた環オホーツク海国際シンポジウムは次のとおり。第1回「豊かな漁業資源を有するオホーツク海をまもる国際連携のあり方」(2006年2月27日)。第2回「氷海域を囲む周辺地域の持続可能な開発に向けて」(2007年1月23日)。第3回「北海道とロシア極東地域との経済および環境面における交流の拡大に向けて」(2008年1月30日)。特別編「北海道とロシア極東地域の持続可能な開発に向けた環境フォーラム(北海道洞爺湖サミット記念環境総合展)」(2008年6月19日)。第4回「環境と水産資源の持続可能性: 中国と北海道の研究協力に向けて」(2009年3月24日)。

注3) 共同声明の全文は下記サイトにあります。

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20091116tabata_j.html

◆ 共同利用・共同研究拠点公募プログラム・シンポジウム ◆
**「北西ユーラシア歴史空間の再構築 ロシア外部の史料を通じてみた
前近代ロシア世界」開催される**

10月31日、11月1日の両日にわたって、ロシア外部の史料に通暁する専門家の報告に対して、ロシアの専門家が迎え撃つ形で討論をおこなうという、大変ユニークな研究会が開かれました。これは、スラブ研究センターの共同利用・共同研究拠点公募プログラムとしては、記念すべき第1回目のシンポジウムでした。スラブ研究センターは、歴史研究では近現代に重心が偏っていますので、前近代の研究者とどのように協力関係を築いていくかは、以前から大きな課題でした。そうした中で、北欧中世史で新進気鋭の小澤実氏(名古屋大学)の熱意によって、各専門領域で第一線の研究者をセンターに糾合できたことは、大変光栄なことでした。

我々は、ユーラシアという言葉を使うとき、ともすれば歴史的に一貫したシステムとしてその空間を想定しがちです。しかし、今回のシンポジウムで、「北西ユーラシア」という空間を設定して浮かびあがったのは、そこに住む人間集団の間に直接的な接触のない時期、少なくともお互いに関心を持たなかった時期、そして文字記録から抜け落ちている時期が、長く存在したということでした。「史料の沈黙」の意味が、セッションを横断的に議論されたことは偶然ではありません。今回の研究会では、時代と地域によっては必ずしも豊かではない史料を精読することを通じて、どのような問題設定によって、「北西ユーラシア」という空間が有意義な研究対象になりうるのかが、真摯に検討されました。[長縄]

講演： 「アラビア語史料に記録された北西ユーラシア世界 とくにイブン・ファドラーン『報告書(リサーラ)』による」 家島彦一(早稲田大学)

第1セッション： 「中央アジアの視点」 赤坂恒明(早稲田大学)、川口琢司(藤女子大学)、長峰博之(北嶺中・高等学校)
コメント：堀川徹(京都外国語大学)

第2セッション： 「イスラーム世界の視点」 小笠原弘幸(青山学院大学)、磯貝健一(京都外国語大学)
コメント：濱本真実(人間文化研究機構)

第3セッション： 「スカンディナヴィアの視点」 小澤実(名古屋大学)、成川岳大(東京大学)
コメント：細川滋(香川大学)

第4セッション： 「ビザンツ帝国の視点」 草生久嗣(千葉大学)、橋川裕之(静岡県立大学)
コメント：宮野裕(北海道大学)

◆ 2010 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした 総合的研究」に関する公募 ◆

センターは 2010 年度からの共同研究・共同利用拠点の本格的な立ち上げに向けて、これにかかわる公募を実施しました。本事業の目的は、「スラブ・ユーラシア地域研究」に関する諸分野における共同研究及び共同利用をさらに発展させるため、国公立大学等に所属する研究者に呼びかけ、広い分野からの参加による研究の向上・発展を目指すものです。2010 年度の応募数はプロジェクト型 8 件、共同利用型 10 件、採択数は プロジェクト型 5 件、共同利用型 10 件でした。いずれも、学外委員が過半数を占める審査委員会による審議を通じて決定されました。[編集部]

2010 年度採択者一覧（プロジェクト型）

申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
今西 一	小樽商科大学商学部経済学科 教授	近現代サハリン・樺太における境界変動と跨境の人流・物流に関する研究：ロシア極東・北東アジア地域における相互理解に資する歴史記述を求めて
小森 宏美	京都大学地域研究統合情報センター 准教授	ロシア・東欧地域における領域性認識と歴史表象の関係
下斗米伸夫	法政大学法学部 教授	古儀式派から見たロシア・ソ連史
仙石 学	西南学院大学法学部 教授	ポスト社会主義国における選挙データの体系的整理（継続）
溝端佐登史	京都大学経済研究所 教授	ロシア多国籍企業の経営戦略に関する実証研究

（共同利用型）

申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
伊藤美和子	大阪大学・神戸大学・佛教大学・園田学園女子大学 非常勤講師	ヴィゴツキーによるポテブニャの批判と受容
江村 公	京都造形芸術大学 非常勤講師	科学と芸術の協同：20 世紀初頭ロシア芸術と身体・感性のテクノロジーに関する歴史的考察
大山麻稀子	横浜国立大学 非常勤講師	19 世紀後半から 20 世紀初頭のロシア・インテリゲンチアの文学的思想の系譜：ナロードニキとドストエフスキー
小椋 彩	川村学園女子大学 非常勤講師	戦間期ポーランドの亡命ロシア文学
カレイラ 松崎 順子	東京未来大学 専任講師	CEFR 導入以降のハンガリーの外国語教育
酒井 英子	石川県立看護大学 非常勤講師	クシュニエルにおけるチュッチェフの詩の間テクスト的展開
塩谷 哲史	筑波大学大学院人文社会科学部 准研究員	アムダリヤ水利権問題をめぐる帝政末期ロシア＝ヒヴァ・ハン国間関係の研究
日臺 健雄	一橋大学経済研究所 研究機関研究員	世界金融危機下のロシア自動車産業：政府による支援策と外資の動向
平野恵美子	早稲田大学演劇博物館演劇研究センター グローバル COE 特別研究員	19 世紀末から 20 世紀初頭の帝室劇場のバレエ・オペラ研究
毛利 公美	東京大学大学院人文社会系研究科文学部現代文芸論助教	亡命の詩学：ロシア第一次亡命文学再検討の試みに向けて

◆ 2009 年度特任教員（外国人）の変更 ◆

12 月から赴任予定だったヴァジム・ヴォルコフ氏が個人的な事情で来日が困難となったため、急遽協議委員会を開き、下記の副候補者として選抜されていた方を招へいすることに決定しました。[荒井]

クダクバエヴァ、ジャナト ベコヴナ (Kundakbayeva, Zhanat Bekovna)

所属・現職：アルファラビ名称カザフ民族大学歴史学部准教授

研究テーマ：現在の中の過去：現代ロシアとカザフスタンの学問的ディスコースにおける帝国の記憶と表象

予定滞在期間：2010 年 1 月 6 日～3 月 30 日

◆ 朴氏の滞在 ◆

韓国ソウル大学人文学部の朴 (Park Hyun-Seop) 教授が、2009 年 9 月から 2010 年 9 月まで、本務校サバティカル研修のためセンターに滞在中です。ご専門はロシア文学・文化で、現在の中心テーマは「エイゼンシュテインの映画理論：認知論的アプローチ」。大変穏やかな人柄で、熱心に研究に取り組んでおられます。

研究上の交流をご希望の方は、下記にご連絡ください。[望月]

望月哲男：tetsuo@slav.hokudai.ac.jp

◆ ペナティ氏の滞在 ◆

イタリア人の歴史研究者ベアトリーチェ・ペナティ (Beatrice Penati) 氏が、2009 年 10 月 4 日から 2 年間の予定で、日本学術振興会外国人特別研究員としてセンターに滞在しています。「ウズベキスタンにおける土地水利改革：集団化以前の農村社会のソヴィエト化」をテーマに、1920 年代の社会経済史を研究しているほか、その前史にあたるロシア帝政期中央アジアの土地調査や税制についても論文を書いています。また、2004 年に提出した修士論文ではタジキスタンでのバスマチ運動（反ソ闘争）を、2008 年に提出した博士論文ではヨーロッパにおけるロシア・ムスリム亡命者の運動を扱うなど、非常に関心が広く、しかもすべてのテーマについて一次史料に基づく緻密な研究をしています。

現在は、ヨーロッパの研究機関よりも豊富な蔵書のあるセンターの環境を気に入って意欲的に研究を進めており、既に大学院の授業で現在の研究テーマについて、セミナーで博論のテーマについて報告をされました。特に後者では、戦間期日本のムスリム亡命者政策とヨーロッパ諸国のそれとの違いなどについて、興味深い議論がなされました。ペナティさんは今後、さらに多くの日本人研究者との交流を望んでおられますので、関心のある方はご連絡ください。[宇山]

◆ 2010 年度鈴川・中村基金奨励研究員募集 ◆

鈴川・中村基金の奨励研究員制度を利用して、これまでに多くの大学院生がセンターに滞在し、センターおよび北大附属図書館の文献資料の利用、センターで開催されるシンポジウム・研究会への参加、センターのスタッフとの意見交換をおこない、実りのある成果を挙げてきました。

2010 年度も昨年同様に募集をおこなう予定です。募集人数は数名とし、助成対象者は原則として博士後期課程以上の大学院生です。助成期間は1週間以上3週間以内です。滞在期間は、スラブ研究センターの行事をご勘案の上、決めていただければと思います。最終的な日程の調整は、ホスト教員とおこなうことになります。行事につきましては、以下をご参照ください。
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/seminors/index.html>

募集の開始は2月中旬頃、締め切りは4月末を予定しています。募集要項・応募用紙をご希望の方はセンターまでご連絡ください。なお、募集要項・応募用紙はセンターのホームページでも参照およびダウンロードできます。[長縄]

◆ 専任研究員セミナー ◆

下記の専任研究員セミナーが開かれました。

- ・11月25日：岩下明裕 「4でも0でも、2でもなく」再論：日口の今とこれから
センター外コメンテータ：中村研一（北大公共政策大学院）

このペーパーは、岩下氏が2005年の著書『北方領土問題』（中公新書）で提起した議論を、最近の北特法改正や日口経済関係緊密化を背景としてさらに大胆に進めたものでした。「固有の領土」論や「不法占拠」論を検証し、四島の中での歯舞群島の特殊性を踏まえたうえで、日米中口の4国間関係の中での北方領土問題・日口関係の展開の多様なシナリオを提示しました。議論も大いに盛り上がりました。[宇山]

◆ 非常勤研究員セミナー ◆

12月7日に2009年度の非常勤研究員セミナーが開かれ、以下の2名が報告しました。

草野佳矢子 帝政ロシア内務省と移住政策：1902-1904年

討論者：豊川浩一（明治大学）

前田 しほ 証言という文学：スヴェトラナ・アレクシエーヴィチによる戦争神話の解体

討論者：三浦みどり（翻訳家）

オーソドックスな手法の研究であると同時に細部に重要な発見を含む草野報告と、女性文学と戦争神話論の両方向で果敢に議論を進める前田報告という、対照的なスタイルの発表でしたが、どちらについても充実した議論がおこなわれました。さらなる研究の発展に期待が持たれます。[宇山]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース119号以降の、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです。[大須賀]

11月16日 山崎佳代子（ベオグラード大、セルビア）「国境とアヴァンギャルド文学：私たちが繋ぐもの、ひき離すもの」（北海道スラブ研究会）

11月18日 亀田真澄（東京大・院）「ザグレブ・フィルム作品における摩擦・紛争の表象：1950-70年代における旧ユーゴ文化実践の一例」；仲津由希子（同）「19世紀末～20世紀初頭のポーランドにおける哲学研究について：クラクフ大学哲学部とマリノフスキを中心に」（鈴川・中村基金奨励研究員報告会）

- 12月4日 V. ロマーノヴァ (極東国立人文大、ロシア) 「極東のユダヤ人にかんするロシアの政策 (1860年代～1920年代)」(ロシア語・日本語通訳付き) (センター・セミナー)
- 12月9日 長縄宣博 (センター) 「エンパイア・ステイトで帝国について考える：在外研究の報告」(昼食懇談会)
- 12月20日 「日露戦争とサハリン島：境界・地域・国家」 塩出浩之 (琉球大) 「日本領樺太の形成：制度と統治」；神長英輔 (東京大) 「『北洋』物語の克服：生態史としてのサハリン漁業史」；白木沢旭児 (北大) 「北海道、樺太地域経済の展開：その『外地性』の経済的意義」(GCOE-SRC 合同研究会)
- 12月20日 「地域大国の文化的求心力と遠心力」2009年度第2回研究会「ユーラシア地域大国の神秘主義をめぐって」 中村唯史 (山形大) 「19世紀末～20世紀初めのロシア神秘主義と『東洋』の表象」；武田雅哉 (北大) 「ピリッ！ときた日：電気・心霊・革命」；杉本良男 (国立民族学博物館) 「ロシア神秘主義からインド・ナショナリズムへ」；近藤光博 (日本女子大) ：『神秘の東洋』という言説：インドの事例からの見取り図」(新学術領域研究会)
- 12月24日 A. シモニー、J. アリーナ-ピサノ (オタワ大学、カナダ) 「境界の社会生活：EU 辺境の社会政治学」(英語) (GCOE-SRC 特別セミナー)
- 1月7日 B. ペナティ (日本学術振興会外国人特別研究員) 「『プロメテウス戦線』におけるロシア・ムスリム亡命者：ヨーロッパからの見方 (1919～1939年) (英語) (センター・セミナー)
- 1月8日 星野真 (センタープロジェクト研究員) 「中国と台湾の境界について」(昼食懇談会)
- 1月20日 須田将 (北大・院) 「ウズベキスタン政府招待による2009年下院議会選挙『監視』体験」(昼食懇談会)
- 1月20日 A. ジェンティス (センター) “Sakhalin as Cause Celebre: The Re-signification of Tsarist Russia’s Penal Colony” (センター・セミナー)

人事の動き

◆ 池 炫周 直美さんの就任 ◆



池炫周直美さん

グローバル COE の立ち上げにともない、池炫周直美 (CHI Hyunjoo Naomi) さんが特任助教として採用されました。

池さんは1976年生まれ。カナダバンクーバーのブリティッシュ・コロンビア州立大学 (University of British Columbia) を卒業後、1999年北海道大学大学院法学研究科の修士課程に留学し、政治学を専攻しました。2001年に博士課程に進学、ソウル大学国際研究大学院 (Graduate School of International Studies) への留学を経て、2006年6月に川島真教授の指導下で博士号を取得しました。同年7月から同研究科助教を務め、2009年10月にセンターの特任助教として就任しました。

研究分野は韓国現代政治で、主な関心は韓国における民主化運動、貧困運動や落選運動などといった民主化以降の社会・政治運動、市民社会と市民団体、民主主義の定着、社会政策、そして近年ではワーク・ライフ・バランス (生活と仕事の調和) イニシアティブなどで多岐

にわたっていて、特に1970年代韓国におけるカトリック団体の民主化運動、金大中政権そして盧武鉉政権におけるジェンダー・福祉政策の発展に関する論文を発表しています。センターでは、ワーク・ライフ・バランスイニシアティブをめぐる言説やアジェンダ・セッティングの日韓比較や、進歩対保守又は北朝鮮問題といった韓国に内在する様々な「境界（ボーダー）」についての研究を進めていくようです。[編集部]

◆ 青島陽子さんの就任 ◆

年度途中で留学された前田しほさんに代わり、12月15日から青島陽子さん（19世紀ロシア史、教育史）が2009年度非常勤研究員に採用されました。[編集部]

われわれにウィリアム・クラークは必要か？ 1989年以降のポーランド高等教育システムの変化

ダリウシュ・コウォジェイチック（ワルシャワ大学、ポーランド科学
アカデミー／センター 2009年度特任教授として滞在）

札幌へやってきた私は、いたるところに建てられたウィリアム・クラーク博士を記念するモニュメントにショックを受けた。クラーク博士といえば、札幌農学校、後の北海道大学の創設者のひとりである。大学キャンパスばかりでなく街中いたるところで出くわすおびただしい数の彼のモニュメントを見て、私はトルコ、そしてとくにその大学キャンパスのアタテュルク像を思い出した。だが、ここには大きな違いがある。アタテュルクは外国人ではなかった。政治



エッセイ執筆中の著者

的なものであれ何であれ指導者崇拝というものが私は大嫌いなので、彼が自分のほんの数カ月の札幌滞在の間に日本の教育課程の発展になしたとされる貢献なるものの真偽性に対してすぐさま疑いの目を向けるようになった。「少年よ、大志を抱け！」というそこらじゅうに掲げられた彼のモットーを見るにつけ、「クラークを札幌に実際に招聘した明治期の指導者たちも含めて、日本人たちは彼の到着まで大志を抱いたことがなかったってわけか？それでアメリカからやってきた男から、「大志」という新しい異国的な概念を学んだということか。それともこれは、アジアやアフリカの「原住民」は進んだ西洋人から学ぶことしかできないという典型的な植民地主義的信念にすぎないのかな？」と考えたものだ。

もちろん、外国のモデルや文化にさらされることはつねにきわめて刺激的なことだと私は深く確信している。自分たちの優越性を信じ切って他者から学ぼうとしない者はただ怠惰なだけだ。しかし、外国モデルの自覚的な借用と、その成り立ちや潜在的影響力を実際に理解しないままの無批判な猿真似の間には、非常に大きな隔たりがある。19世紀後半から20



知床クルーズにて

世紀の日本の目覚ましい台頭は、外国からの輸入によるものか、それとも自らが持っていた強さと伝統によるものかという問いはすでに十分に議論されている—もちろん史学史において明確に解決されたというわけではないし、この問題に関して私は専門家でもない。

しかしこのようなコンテキストで、ポーランドの学界がこの20年の間に経験した変化についての私の考えをいくつか皆さんに披露したいと思う。他の東欧の共

産諸国と比較して、ポーランドの知識人は比較的自立していた。1947-1956年のスターリン主義の10年の後はとりわけそうだ。党员でなくとも、マルクス主義イデオロギーにごちゃごちゃと頭を悩ませられずとも、限られたトップの地位を目指すのでなければ、技師にも、医者にも、職業的な陸軍将校にもなれた。それに比べて人文科学はあまり恵まれていなかったが、政治学者になろうと考えたりしなければ（おそらくこの理由で、政治学はポーランドの人文科学研究者たちの間で今日でもしばしば蔑まれる）、あるいは20世紀の政治史のきわめて微妙なトピックを専門的に研究しようというのであれば、研究に関してかなり自由でいられ、中世の戦の結果を説明するのにマルクスを引っ張り出してきたり、日本における階級闘争の表現として生け花を觀賞する必要はなかった。

1956年以降、ポーランドは共産化した欧州諸国の中でおそらく最もリベラルな国家だった。もちろん、この「リベラリズム」はけっして理想化されてはならない。他人の出世への悪意に満ちた干渉や、「匿名の個人」による攻撃、政治的な殺人事件さえ起った。これは限定的な範囲での出来事だったが、熱心な反対派の比較的限られた集団には影響を及ぼしていた。（多くの党员を含む）大多数の市民が日曜日にカトリックのミサに参加し、歴史の教科書には絶対に載っていなかったにもかかわらず、カティンでのポーランド人将校の大量虐殺の責任が誰にあるのかをちゃんとよく知っていた一方で、沈黙による同意がはびこっており、それによって共産党は支配していた。ポーランドの学界人の圧倒的大多数が、第二次大戦期の国内軍（Armia Krajowa）での活動や1944年のワルシャワ蜂起への参加を隠さなかった。これは軍事的にはナチスに対する蜂起であったが、政治的には戦後のポーランドをソ連が支配するという未来への反対であった。ここでは3人の歴史家の名前を挙げるにとどめておく。なんと私立大学であったルブリン・カトリック大学の総長イエジー・クウォチョウスキ、そしてウィトルド・クラ、アレクサンデル・ゲイシュトルである。後者2人はワルシャワ蜂起の敗北の後、ナチスによってリューベック近郊の戦争捕虜収容所に入れられ、そこでフランス人将校で同僚の歴史家という人物に出会った。フェルナン・ブローデルである。この時の友情がフランスの多くのフェローシップに結実し、西側への旅行が再び可能になった1956年以降、ポーランドの若手人文研究者者に提供されることになる。

1980年にはたくさんの教授や学生が「連帯」に加わった。1981年に出された戒厳令のおかげで共産主義はもう10年生き延びることになったけれども、私は自分が1981年から86年ま

で学び1988年に仕事を始めることになった大学が、開かれた議論のためのすばらしい場所となったことを覚えている。1980年代の半ば、入試の筆記試験の最中に、19歳の女子受験生が300人くらいの受験生を前にして、私が答えるように期待されているのは、「真実」なのか、それとも「教科書に書かれていること」なのか、と試験委員会の委員長に尋ねた。会場はそれを面白がりこそすれ、憤慨したりなど決してしなかった。1983年、大学院生としてブロッツワフ（ドイツ語ではブレスラウ）への研究旅行へ出掛けた際、教授からわれわれが耳にしたのは、当時のプロパガンダではなくて、14世紀から1945年までの都市の発展の大半はドイツの文化と制度に結びついていること、そして都市の歴史を理解するためにわれわれが学ぶべきは、まさにそれらドイツの文物であるということだった。また、（ポーランドの共産主義崩壊の一年前の）1988年に助手として入学試験にかかわった折、ある受験生のフォルダに同封されていた、地方の党委員会からの推薦書に私は意地悪く難癖をつけたことがある。すると委員会の議長をしていた先輩の教授が、そんな文書を引用した私をすぐさま咎め、われわれは偏見を持たず、受験生の知識を評価するべきだと言った。自分のCVにこの文書を同封しようと思った受験生本人にはそうでなかったようだが、その場にいた全員に、党の推薦書はそれほど役に立たない、それどころかそんなものは受験生の印象を貶めることだってあるのだということが明らかだった！

私がこういったアネクドットを引っ張り出してきたのも、共産主義ポーランドの大学は共産主義イデオロギーに完全に支配されていたのでは決してないこと、外国との接触や外国からの影響力から完全に引き離されていたのでは決してないということを証明したいからだ。共産主義権力だって学術の不可侵性や自由をいくらか認めたのだ。クラコフ大学が1364年の創設であり、中欧・東欧の最古の大学の一つだという事実は、公的なプロパガンダにとっても、ポーランドの学界メンバーにとっても誇りであった。

そういうわけで、1990年代のすばらしい幕開けが、ポーランドのOECD（1996年）、NATO（1999年）、EU（2004年）への加入で締めくくられたことはそれほど驚くべきことではない。多くの変化はかねてから期待されていたもので、また実際に歓迎された。喜ばしいことに、今日、EUのエラスムス交換プログラムのおかげで私の大学院生たちは、ドイツ、フランス、イギリスそのほかの多くの国（その中には新たにEUに加盟してこのプログラムの恩恵を受けているリトアニア、チェコ、ハンガリーあるいはルーマニアといった近隣諸国も含まれる）の最高の大学で1～2セメスターを無償で学ぶことができる。アメリカの大学にポーランドの若手研究者が頻繁に行っていることから、「学生によるフィードバック」という新機軸が輸入された。これは現在ではポーランドのすべての大学でみられるが、実は私の母校では1990年代から存在した。ヨーロッパの教授の伝統的な講義が中身はあるが退屈なのに対して、ときに笑いで講義を中断させるアメリカのやり方は大いに模倣するに値したし、学生もこれを大歓迎した。私が前の講義で優れていると紹介した外国の書籍を、学生たちが「アマゾン」で買いましたよと時に報告してくれるのも清々しい。西側の一冊の書籍の値段がポーランドの一月分の給料と同じくらいだった20年前には想像もできなかったことだ。たいして異議も出ないだろうと私は学生たちに英文講読を割り当てる。しかし、ポーランドで英語の流暢さが驚くべき進化を遂げたのは、ロシア語、フランス語、ドイツ語といった伝統的に教えられてきたそのほかの外国語が、それぞれ衰退したことの結果だということをわれわれは嘆かねばならない。

若いポーランド人が今日、留学に、仕事に、余暇にと気軽にヨーロッパへと旅するのを見ていると、すくなくともEU圏内では実際にもまた人々の意識の中でもボーダーが消滅しつつあるという感じを強く受ける。

だがもうひとつ、私が触れておきたいそれほど楽観的でない側面というものもある。1989年

以降、われわれが「西側基準」を取り入れるべきだという考えは、ありふれたリップ・サービスになってしまい、よもや西欧民主主義理念を抱くとは思われなかった人物からもそんな言葉は飛び出してくる。西側生活が極めて限られた経験でしかない教育大臣が、われわれの高等教育の水準をアメリカのそれに見合うものにすべきだと宣言しているのをかつて耳にしたことがある。悲しいかな、われわれがアイヴィー・リーグの大学を目指すべきなのか（そして教育省はそういった大学を財政的に支援するのか）、それとも、ポーランドの高校生の平均レベルにも達しないような、アラバマの郊外の短大を目指すべきなのか、大臣は触れなかった。

ポーランドの大学カリキュラムに影響を及ぼす客観的な要因として、学生数の著しい増加が挙げられる。共産主義化のポーランドでは、各世代の約7%が大学を卒業したに過ぎなかったのに、今ではその数は40%に達しようとしている。このような変化は社会全体で見たとき、確かに有益なものではあるが、関係者には悪影響を及ぼしうる。かつては雇用を保障した大学の卒業証書も、今ではそれを約束するものではない。学位論文の審査をパスした博士課程の学生は、遅かれ早かれ大学のポストを得られるであろうことをかつてなら疑わずにいられた。学部学生同様、大学院の学生も増えるにつれて、現在までポーランドの大学卒業生が事実上知ることのなかった、雇用のない状態に彼らは間もなく直面することになるだろう。西ヨーロッパ諸国でしばしば噴出してきたところの、経済的・政治的理由による学生の暴動が、いつの日かポーランドでも起こるかもしれない。

ポーランドにおいて、国立・私立双方の大学が雨後の筍のごとく増殖したことは、教育水準に関してもまたときに逆効果を及ぼしている。トルコではすでに、そのように拙速に設けられた大学に「スラム大学」（トルコ語では *gece kondu*、逐語的には「一夜で建てられた」）なる皮肉なレッテルが貼られている。アカデミックな位置づけが不安定なこれらの大学の総長や教授たちは、外部からの干渉に対しての自治を守ろうとする、より伝統ある教育研究組織の同僚たちと比べると、国の権威により追従的な傾向が見られる。大臣たちが、こういった新しくまだ弱い組織をしばしば好むということが、トルコやポーランドだけでなく、ドイツその他の西欧諸国でも見られるということは全く不思議でない。大半の西ヨーロッパ諸国が長きにわたって社会民主主義者の統治下にあるという事実と相俟って、1968年の反エリート主義的なスローガンは、エリート学府にとって好ましくならぬ雰囲気を作り出すのに一役買った。フランスでは、エリート的な教育研究組織は「グランゼコール *grandes écoles*」の名のもとによりやく生き残っている状態で、かつての名門ソルボンヌのようなところも含めて、一般的な大学は良くも悪くもない水準の大衆教育を提供している。ドイツでは、真の研究やスカラシップはマックス・プランク研究所にしばしば避難所を見出している有様で、大半の大学がポピュリストのスローガンの餌食となった。数年前、ワルシャワ大学は *Network of Excellence* 計画のメンバーに招かれた。これは、社会科学高等研究院やオックスフォード大学などヨーロッパの先進的な組織がイニシアチブをとって作ったものである。しかし、ブリュッセルの選考委員会は提案を退け、ネットワークの財政的な支援を拒否した。これはこの提案がより優れた別のものに負けたということではなく、審査員の一人が内々に明かしたところによれば、それが「あまりにエリート主義的」に思われたためだということだ。あまりにエリート主義的という口実で、*Network of Excellence* への財政支援を拒否することは、その当時の私にはシュールレアリスティックに思われた。しかし今ではそれを、EU内の教育政策に完全に従った、典型的な動きだと考えている。ヨーロッパ最高水準の学生や教授陣がアメリカにさらなるチャレンジを求め、それゆえに最も活動的な革新者や頭脳がヨーロッパから奪われてしまうことは間違いない。

いわゆる「ボローニャ・プロセス」という名の下で、ヨーロッパの高等教育システムを強

制的に統合しようとする動きを、私はこの文脈で見ている。3年間の自立的研究の結果としてのM.A.論文という栄冠に飾られた5年間のカリキュラムが、1年間のゼミの後に体裁だけ整えたB.A.論文を書くよう、また同様に薄っぺらいM.A.論文をその2年後に書くよう、われわれは学生に強いなければならないのである。われわれの若い同僚、研究者仲間としてかつては扱われていた博士課程の学生たちは、彼らの地位を一般学生のそれにまで引き下げるものとして、「ボローニャ・システム」をすでに嘆いている。かつて博士課程の学生とその指導教官を結びつけていた共通の信頼関係に代わって、毎年の試験や頻繁な点検にさらされることになったのだ。共通のモジュール・システム(学部3年+修士2年)は国際交流をより容易にするだろうという議論は、単純に成り立つものではない。エラスムス交換プログラムはボローニャで宣言されたやり方をEUの大半の国が採用する以前でも、10年間立派に機能してきた。そのようなモジュール・システムが柔軟性を促進するだろうという議論もまた同様に非現実的である。数学の学士の学位を持っている学生が日本学の大学院のコースに、すなわち彼が数学を学んでいた3年間の間、すでに日本語を学んでいる学生たちに加わることが可能かどうかというのだろうか？あるいはその逆も？

私の懐疑的な態度にもかかわらず、かつて同僚たちに主張したことを覚えている。いったんEUの加盟申請した以上は、既存の加盟国が合意に達したルールに対してわれわれは疑義を抱けない、なぜならそんなことをすれば我々は加盟できなくなるからだ、と。ポーランドが「クラブ」に加入して5年が過ぎた今日、「ボローニャ宣言」が一定水準の教育のためではなく、EUの政治家たちの大衆迎合的な計画に資するものであることを、私は以前にまして確信することとなった。これはわれわれが共産主義時代に慣れ親しんだところの「ウラヴニロフカ」(ロシア語からの借用語でポーランド語では「水平化・均等化」を意味する)の別の形に他ならない。最高学府を目指す先進的な教育研究組織にとって、均等化が有益であることはありえない。

今日のポーランドで雨後の筍のごとく増えている流行に乗った舶来モノとして、ジェンダー研究がある。私と同様、ポーランド人女性研究者の幾人かは、ドイツやアメリカから来た「フェミニズム宣教師学者」と遭遇した際、彼らが、ポーランド人女性は抑圧された「原住民」であり、彼女たちから「虚偽意識」を取り除かねばならないとみなしているという印象を受けるのである。アメリカや西欧の多くの学部よりも、共産主義ポーランドで女性教授を見つけることのほうがたやすかったといった類のいかなる議論も、まったく意味がない。まるで笑い話のようなこのような誤解も、ブリュッセルから学術プロジェクトへの資金を調達するためには、プロジェクトに要請される「女性参加率」のクオータを満たさなければならないということを知れば、それほどおかしくなくなってくる。知的に劣っていて人工的な昇進が必要であるように扱われる女性研究者にとってきわめて屈辱的なことだが、このように政治的に打ち出された数値上の諸標準は、最高学知に達しようという高らかにうたわれた目的にはあまり貢献しないのである。通常このような施策を推進する左派あるいは極左の政治家たちは、ポーランドその他のヨーロッパの大学でユダヤ人の数を制限するために、1930年代に同



一歳半の息子さんの異文化体験

様の哲学が採用されたことをしばしば忘れてしまっている。社会における比率に比べて、ユダヤ人が大学に「超過代表」されていると考えられたため、ほかのエスニック集団を増やすために打ち出された「格差是正政策」は、実際のところユダヤ人の教授や医師、弁護士、そして学生を標的としていた。しかしユダヤ人の学生が豊かで教養ある家の出とは限らなかったのである。こういうことを知っていると、今日大学レベルで行われているいかなる形の「格差是正政策」にも疑いの目を向けてしまう。これらは不公平に扱われたと感じる関係者の記憶に傷跡を残すし、ほとんど効果的でもない。もしこのような方策を機能させようと思うなら、もっと早い段階で、チャンスをより平等にするのにまだ遅くない学童前教育や小学校レベルの教育に適応されるべきだ。さもなければ、これらはかつてずっと早い段階でしかされた国家や社会の失敗を補填しようと考えている政治家たちの面子を立てる道具としてしか役に立たない。国が保障する育児支援のシステムも、数値上の割り当てよりはずっと効果的に、より多くの女性が大学に参加するのに効果的であるように思われる。

ポーランドの学界の歴史にとって、ここ 20 年はおそらく一番「ラッキーな」ものであっただろうとかつて私は考えた。共産主義によって押し付けられた官僚主義的な束縛から自由になったがドイツやデンマーク、あるいはスペインの研究者たちがそれぞれ官僚的な大臣に対して陥っている奴隷的な服従状態にはわれわれはまだ陥っていない。ましてや、これまであらゆる民主主義的な統制を逃れ、むしろ一般市民の生活の統制を目指してきた機関であるブリュッセルの欧州委員会の指示に盲目的に従うことには、われわれはよりいっそうの躊躇を感じるのである。やはり私は楽観的に構えたいし、ヨーロッパはその東部も含めて、その莫大な人的・経済的潜在力をより効果的に利用することができるし、それは高等教育システムを世界規模でより競争力の高いものにしていくことでも可能だと考えたいのである。

(英語より高橋沙奈美訳)

エンパイア・ステイトで帝国について考える



中央のひと際高いのがエンパイア・ステイト・ビルディング

ところで、ニューヨーク州は「エンパイア・ステイト」と呼ばれる。今振り返ってみると、私の旅の体験とそこで考えていたことは、まさに人間の移動と帝国との関係を巡って、シンクロしていた。以下では、特に印象的だった風景を切り取ってみた。

長縄宣博（センター）

スラブ研究センターの寛大なるご支援を得て、2009 年 4 月おわりから 10 月はじめまで、在外研究の機会を得た。8 月末までは、豚インフルやマイケルジャクソンの死に揺れるニューヨークで、コロンビア大学ハリマン研究所に所属し、9 月一杯はモスクワのロシア帝国外交文書館に通った。英語の運用能力を高めるといふ本来の目的からすれば、丸々アメリカにいたべきだったのだが、通常の海外出張は 2 週間が限度なので、文書館調査にどうしても 1 ヶ月の時間が欲しかったのである。

コロンビア大学

アメリカでの所属を選んでいた時に念頭にあったのは、スラ研とは関係がないか、薄いところに行きたいということだった。ハリマン研究所には、以前から関心があった。ここでは、毎年、特定のプロジェクトに基づいて、ポスドク研究員を募集し、彼らの任期最後の4月に大掛かりなワークショップを組織させているが、2007-2008年には、Russia and Islam: Religion, the State and Modernity during and after the Age of Empire という、とても魅力的なプロジェクトを遂行



コロンビア大学

していたのである。また、この時の研究員の一人が、2005年夏にカザンで知り合って以来、毎年何らかの研究集会で会っていた（2007年冬にはスラ研の国際シンポにも来た）James Meyer だった。彼からも、研究環境、とりわけ豊かな大学図書館について話を聞いていた。もっとも松里先生からは、「あなたNYはやめなさいよ。ブロードウェイにはまって絶対、勉強できないから」と忠告を受けたが。とはいえ、2008年11月に、スラヴ学会（AAASS）と中東学会（MESA）でJamesと一緒にパネルを組織した時、最終的に決めた。親切にも、彼がまずは研究所の所長さんに口をきいてくれた。

私が渡米の準備をしていた頃には、Great Power(s) in the Mediterranean というプロジェクトが走っていた。4月初旬には、ポスドク研究員の Elena Astafieva が中心となったワークショップ Great Powers in the Holy Land: From Napoleon to the Balfour Declaration が予定されていた（<http://www.harrimaninstitute.org/MEDIA/01344.pdf>）。最近私は、ムスリム社会と帝政ロシアの国家機構との相互関係を扱った博士論文でやり残した課題として、メッカ巡礼について勉強しているので、これについて本を執筆中の Eileen Kane も来るこのワークショップをととても楽しみにしていた。しかし、交流訪問者ビザ（J-1）取得に予想以上に手間取り、結局、NYに辿り着いたのは、4月22日だった。そして、かろうじて翌日から、ハリマン研究所が毎年ホストを務める民族研究学会（Association for the Study of Nationalities）の年次集会に滑り込むことができた。幸いにも、Elena Astafieva と Eileen Kane はここでもパネルを組んでいたのので、話をすることができた。年次集会は、前年夏のグルジア紛争の煽りか、コーカサス関係のパネルが目立った。

実はハリマン研究所自体も、グルジア語の授業を開講するなど、グルジアとの関係を重視している。5月4日には、トビリシ大学などの学者を招いた、「ヨーロッパとアジアの文化の十字路にあるグルジア」という研究会あった。それは明らかに、グルジア本国の肝煎りであり、グルジアの国連代表に加え、グルジア統一省大臣 Temur Iakobashvili も出席する力の入れようだった。しかも、この大臣が前年8月の戦争を振り返り、「グルジアのメガフォンはロシアのよりも小さくて、グルジアの立場を世界では聞いてもらえなかった」と発言したのは驚いた。サアカシュヴィリ大統領も留学したコロンビア大学の一角で、プロパガンダ丸出しの研究会を組織できること自体が、グルジアの声の大きさを示しているのではないかと。

研究所のもう一つの重点地域は、トルクメニスタンである。5月1日には、国内のエネルギー供給の責任者アイマメドフが、研究所に挨拶にきた。その会合には、国連等からもエネルギー

関係の実務家が集まった。アイマメードフが、僻地の代替エネルギーとして風力発電に注目している旨を伝えると、即座に専門家が、特定地域の気象データを提供する用意があると即座に返した。また、トルクメニスタンから留学生を受け入れる話も進められた。こうした機動力や即戦力は、なかなか日本の大学では想像できない。「教育プログラム」の名の下で、様々な戦略的地域からエリートの子弟を招き、高等教育を施し、将来の有事に際しては、親米政権の要となるように、彼らを利用する、そうしたシナリオが思い浮かんだ。グルジアとトルクメニスタンの例は、アメリカの作る世界秩序の縮図のように思われた。

残念ながら、ロシア史研究では研究所に翳りが射しているように思われる。以前は、Mark von Hagen や Richard Wortman の下で博士論文を書きたいという学生が集まっていたが、von Hagen が別の大学に移って、活気が薄れたようだ。この間、ロシア帝国のイスラーム研究で重要な本を書いた、スタンフォード大学の Robert Crews などスカウトしようとしてきたらしいが、成功していない。学期の終わりにかけた時期に来た私も悪いが、5月11日に研究所でセミナーを開かせてもらった時も、関心を持ってくれた人は僅かだった。そんな中で、Richard Wortman 先生がわざわざ研究会に足を運んで、コメントをしてくださり、後日、論文まで見てくださったことには、感謝感激だった。

5月に入ると、連日、各学部やコロンビア傘下のカレッジの卒業式が続いた。その中で最も印象的だったのは、5月18日に行われた、Barnard College という女子大の卒業式に、ヒラリー・クリントンが来て、演説したことだった。

NY 滞在中の私の仕事場は、Butler Library という大学の総合図書館だった。今回の在外研究では、今後十年くらいは取り組める研究課題をじっくりと考えることを中心に据えていたが、平行して、これまで書き散らかしていた英語のペーパーを投稿論文にまとめ直す作業と、後述するイリノイ大学の夏期セミナーの用意を行った。その間に、最近ではロシア帝国の宗教行政全般について重要な仕事をしている Paul Werth さんから原稿依頼があり、これに取り組んだ。図書館は、文字通り宝の山である。書庫の床に座り込んで、面白そうな本を手当たり次第に取ってはめくる至福の時間を久しぶりに満喫できた。

ローカルなこだわりを持ちつつも、どうすればグローバルな話ができるのか。それが、私の頭から離れなかった問いである。メッカ巡礼の研究は、格好の材料のように思われた。しかも、巡礼が絶えず繰り返される儀礼であるならば、19世紀末から現代に至るヴォルガ・ウラル地域のムスリム社会の動態を跡付ける作業にもなるはずである。そこで、イリノイ大学のセミナーには、その試論となるペーパーを出してみた。他方で、旧ロシア帝国領内のムスリムにとってのロシア革命とそこから生まれた国家を再考するようなテーマにも取り組みたいとも思った。その際には、ヴォルガ・ウラル地域へのこだわりは残しつつも、これまでも意識してきたように、カザフ草原や中央アジアへの広がりもほしい。こうした様々な考えが頭の中で渦巻いていたが、これらすべてを横断する一筋の光を与えてくれたのが、一冊のバシキール語の本だった。それは、1966年にウファで出た Karim Khakimov という革命家の伝記だった。彼の人生は実に数奇だ。オレンブルグ地方の革命・内戦で頭角を現した彼は、自身がその組織に深く関与したタタール・バシキール部隊と共に、フルンゼの右腕として、1920年にトルキスタンに赴き、ブハラ革命に貢献。ブハラ共和国の党組織で要職に。その後、外交官に転じ、1921年から24年までイランのマシュハド、ラシュトで総領事。1924年からは、アラビア半島のヒジャーズとイエメンで活躍した。ロシア革命100周年くらいには、『アラビアのハキーモフ』のような本を書きたいと思った。

ニューヨークのタタール人

2001-2003年にカザンに留学していた時から、NYにもタタール人コミュニティがあり、彼

らが母語をよく保持していることは聞いていた。カザンには、タタルスタン政府が民族運動を統御する目的で1992年に作った、全世界タタル会議という組織がある。これは、その名の通り、世界中に離散するタタル人をタタルスタンという「祖国」に糾合する運動体である。そして、ロシア連邦内でタタル人の地位に関わる問題が浮上する度に、その存在感を誇示してきた。例えば、私が滞在していた2002年には、同年の国勢調査で、タタル人がサブグループに分類されない一つの民族であることをアピールすべく、世界各国からタタル人が集結したのである。そんなことを思い出して、とりあえずコミュニティのウェブサイトを探してみることにした。

American Tatar Association どうやらこれが探していた人々らしい。早速、その会長らしい人に、自分はタタル人の歴史を勉強していて、カザンであなたたちのことを聞いたから知り合いになりたい旨を、タタル語と念のため英語でメールを書いた。すぐに返事があり、5月10日に母の日のイベントで、協会に人が集まるから来てください、とタタル語だけで書かれてあった。場所はクイーンズ地区。地下鉄の7番線の終点で降り、母の日の花束を買って、タクシーを捕まえた。指示された住所で降り、どきどきしながらドアを開けると、そこはカザンだった。目に飛び込んできたのは、タタルスタンの国旗、スュムビケの塔、20世紀初頭の詩人トゥカイの肖像画。そして、耳に入ってくるのは、懐かしいタタル語のおしゃべりと歌謡曲。それにつられて中に足を進めると、居合わせた人々は、花束を持ったよそ者を不審そうに遠目で眺めていたが、「Isenmesez! (こんにちは)」とこちらが声をかけると、「Sin Tatar mini?! (お前タタル人か)」と四方から握手を求められた。彼らは、私が日本から来たと知っても、なかなかタタル人ではないと信じられない様子だった。

実はそれには理由がある。彼らの多くが満洲や日本で生まれ育っているのである。今でも、70-80歳くらいの人々は、本当に流暢な日本語を話し、こちらもうっかりと日本語が出てしまったほどである。彼らは、君が代やサクラサクラに加え、怪しげな軍歌も口ずさむことができる。彼らの祖先は、ヴォルガ中流域からウラル山脈南部の出身であり、ロシア革命以前からハルビンなどに流れていたとはいえ、革命と内戦後に、大挙して満洲と日本に移り住んだ人々である。とりわけ東京と神戸には、彼らのモスクや学校、印刷所まであった。戦前の日本人にとって、タタル人は最も身近なムスリム集団の一つだったほどである。しかし、日本の敗戦、そしてそれまでソ連からの庇護を求めていた満洲国が瓦解すると、今度は中国共産党から逃げなければならなくなった。また、日本にいた人々も、焼け野原の中で大変苦しい生活を強いられた。彼らの運命の転機となったのは、朝鮮戦争である。その時、国連軍として参戦していたトルコ軍将兵は、自分たちを慰問してくれるタタル人の苦境に胸を打たれた。そして、復員した将兵がトルコ政府に働きかけることで、タタル人はトルコ国籍を取得し、トルコに移住できるようになったのである。この辺の経緯については、松長昭『在日タタル人：歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』（ユーラシア・ブックレット No. 134）に詳しい。現在、NYにいるタタル人の多くは、トルコ経由でアメリカに移った人々である。話を伺うと、冷戦期にはソ連のスパイではないかと疑われて大変苦勞されたようだ。彼らは、諸帝国のせめぎ合いと崩壊の間を縫うようにして生きてきたのである。

不思議なことに、彼らに「もともとのご出身はどちらですか」と尋ねると、どの人も判を押したように、「カザンから」と答える。そんなことはないと思い、よくよく話を聞いてみると、ウファやペンザの周辺出身と答えてくれる人もいた。そこでピーンときた。これは「想像の共同体」なのだと。満洲や日本で生まれ育った人々は、つい最近までカザンを訪れる機会に恵まれなかったはずだ。彼らが胸に抱えてきたのは、ハルビン、東京、神戸の学校で勉強したスュムビケの物語やトゥカイの詩である。そして今日、アメリカ市民となった彼らの

心の故郷は、タタルスタンとその首都カザンに収斂している。全世界タタル会議の政治的な思惑と微妙に重なりながら。そんな考えを巡らせて、ふと部屋の片隅に目をやると、一枚の白黒写真が額に入ってひっそりとかかっていた。それは、彼らが最も慣れ親しんだはずのハルピンのモスクの写真だった。

イリノイ大学ウルバナ・シャンペイン校



イリノイ大学ウルバナ・シャンペイン校

夏休みの大学は閑散とした「死んだ季節」だと言われるが、ここは活力にみなぎっていた。ここには、*Slavic Review* を出している研究所があり、スラ研でいえば、鈴川・中村基金の研究員制度の拡大版のようなことを行っているのである。よって、ここには夏の間、研究所の奨学金を得た研究員の他、多くの大学院生や著名な研究者が文献調査や研究会のために集まってくる。この図書館も宝の山であり、Butler Library にもないような本が、ザクザク見つかった。また、図書館の司書の方々もとてもフレンドリーだった。

(2009 年夏の研究員のリストは <http://www.reec.illinois.edu/srl/associates/>)

6 月 14 日から 21 日と短い滞在だったが、人間の移動と帝国との関係という私の頭から離れない問題を多くの人と共有することで、大いに啓発されるという非常に貴重な体験をした。この夏の研究会のテーマは、ずばり人間の移動。渡米の準備をしていた最中に気付いた時には、国際会議 Russia's Role in Human Mobility の報告者の募集は終わっていたが、その前にある若手研究会 Mobility in Russia and Eurasia はまだ募集中だった。米国国務省の資金が入っているので、「政策に使えるような報告の提案をすること」という条件が付いていたのには困ったが、現代ロシアのメッカ巡礼の話も織り込むことで、なんとか若手研究会には入り込めた。選ばれたのは 8 名で、外国からは私だけ。内訳は、人類学者 4 名と歴史家 4 名。会のまとめ役は、インディアナ大の人類学者 Sarah Phillips とシンシナティ大の歴史家 Willard Sunderland。一口に移動といっても、いろんな話題があるものと驚いた。ソ連初期の自動車産業と道路建設、大祖国戦争時の避難民、EU の障壁でウクライナに足止めされる移民や難民、ウクライナやチェコの女性の社会進出、グルジアから出稼ぎに出る女性。ムスリム地域の話では、18 世紀後半のロシア帝国の北コーカサス進出を扱った Sean Pollock もいた。ペーパーは事前に読むこと



研究会後の懇親会

になっていたの、一人持ち時間 45 分で、朝から晩まで徹底的に議論した。一見ばらばらなテーマだが、特定のテーマの切り口が、別のテーマにも有効ではないかといった具合に、白熱した意見交換がなされた。英語でこれほど濃密な議論をしたのは初めてだ

国際会議は、ユーラシア大陸の古今東西を移動という言葉でダイナミックに切り取った Stephen Kotkin の基調講演で始まった。パネリストには顔見知りも多く、Anatoly Remnev、Robert Geraci、Eileen Kane、James Meyer、Charles Steinwedel ほか、IITP の英語論文講習会で講演された Diane Koenker や、Andreas Renner、Andrew Gentes といったスラ研に関係する人もいた。会議では、人間の移動を制御する国家の役割と限界、交通機関の発達やそれに伴う人間の移動が様々な地域に与える影響、様々な種類の旅を通じて人々が抱く心象地理、ロシアと世界の他の地域との比較可能性などなど、実に多様で刺激的な問題提起がなされた。

(国際会議については、<https://netfiles.uiuc.edu/jwr/www/mobility2009/index.html>)

6 月 21 日から 24 日には、シカゴを観光した。親切にも Charles Steinwedel さんが、イリノイ大学から車で連れて行ってくださり、郊外のお宅で二泊お邪魔させていただいた。また近年、AAASS のパネルやスラ研の国際会議などの際に、研究上の助言や励ましをいただいている Michael Khodarkovsky 先生とも、シカゴ大学で再会できたことは光栄だった。

ロシアへ

今回は、NY のロシア領事館で入国ビザを取得した。そのためには、米国に合法的に居住していることを示すビザの提示が求められるので、苦勞して J-1 を取得したかいがあった。連絡の行き違い等で、ロシアの研究機関からの招待状の到着が遅れたとはいえ、J-1 に比べると、拍子抜けするほど簡単にビザが下りた。とはいえ、旧ソ連出身者やその子供のパスポートの発給やその他の手続きには、玄関の外に長蛇の列ができ、いらいらした人々が大声のロシア語でまくし立てていた。それを横目に機嫌よく帰る途中で、偶然見つけた散髪屋



ニューヨークは街角の至る所でロシア語を耳にする。体感では、スペイン語に次ぐのではないかと思います。写真は、ロシア人街のあるブライトンビーチにて

に立ち寄ったが、その主人はロシア語のラジオを聴いていた。若いウズベク人だった。

9 月 1 日、J.F. ケネディー空港を出発、翌日にヘルシンキを経由して、モスクワに入った。今回のロシア滞在の目的は、国際秩序、ロシア帝国のムスリム行政、ムスリム社会内部の政治を結び付けるというアメリカで温めた発想に基づいて、資料収集を行うことにあった。モスクワで最も楽しかったのは、ロシア帝国外交文書館での仕事である。ここでは、在イスタンブールのロシア大使館や各地の領事館が、メッカ巡礼にどのように関与したのかを生き生きと物語る貴重な文書を読んだ。また、ヒムキの国立図書館別館では、帝政期の新聞やソ連初期の中東外交に関する博士論文を閲覧した。

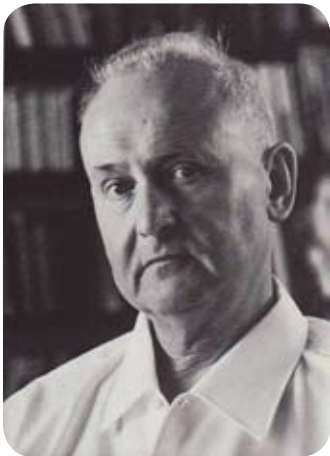
ローカルな中にグローバルな話を見出すという課題にとって、カザンでの仕事は意義深かった。この町には、長期で留学もしたし、何度も訪れているが、訪れる度に新しい発見がある。4 日間だけだったが、旧友に会う合間に図書館、図書館の合間に旧友に会うといった具合に

密度の濃い滞在だった。大学とその図書館では、留学時代の私を知る人が多く、便宜をはかってくれたおかげで、効率的に史料収集ができた。最後の夜は、郊外の友人宅の蒸し風呂に行くのにも間に合った。新しい出会いということでは、カザンのロシア・イスラーム大学で収穫があった。ここの学長は、Rafik Mukhametshin という旧知の歴史家だが、神学部の学部長 Damir Shagaviev とは初めて話をする機会を得た。紙幅の都合上、詳述できないが、30代と思しきの若い学部長が語ってくれた知的遍歴は、現代ロシアのイスラーム復興を考える上で、極めて示唆に富んでいた。そこでピーンときた。現在、新学術領域研究の第5班で研究課題として考えている、イスラーム教育ネットワークの話に、彼の経験を組み込めないだろうか。すばらしいことに、Shagaviev 氏自身、マレーシアの国際イスラーム大学で学んでおり、英語にも堪能ときている。近いうちに、第5班の先生方とカザンに戻って来たいと思った。

ひとりの詩人のひとつの言語：

孤高のラフ詩人ウンドラ（オンドラ）・ウィソホルスキ
（1905-1989）没後 20 周年に寄せて

野町素己（センター）



晩年のウンドラ・ウィソホルスキ
（『ラフ詩：1931-1977』より）

現代のスラヴ諸語の中で、最も使用者が多い言語はロシア語であることに疑いはない。全世界で話者数がゆうに2億人を越えている。しかし最も使用者が少ないスラヴ語は何語だろうかという、具体的な名前がなかなか頭に浮かばない。

では、具体的な言語ではなく数字から考えてみよう。言語使用者の最小数は1であるが、使用者1名のスラヴ語はあるだろうか。20世紀全体を通してみると、必ずしも同列には扱えないが、使用者1人というケースはいくつか存在する。ここでは、思いつくまま3つの例を挙げてみよう。

最初の例として、まずスロヴィンツ語（方言）が挙げられる。現在ではカシュブ語の1方言と考えられるスロヴィンツ語は、北ポーランドのポメラニア地方で話されていたが、20世紀中ごろに絶滅した。最後の話者が実際にスロヴィンツ語をどれぐらい話せたかはわからないが、話者1名という悲しい瞬間があったはずである。

次の例は、同じく西スラヴ諸語に属するポラブ語である。ポラブ語はエルベ川の左岸で話されていたが、18世紀の半ばに絶滅した。1973年の第7回国際スラヴィスト会議にて、ドイツのスラヴ語学者ラインホルト・オレシュ（1910-1990）は、僅かに残された文字テキストや単語集からポラブ語を言語学的に再建し、この死語を用いて研究報告を行った。無論、スロヴィンツ語の場合とは性質は異なるが、復活させたポラブ語をある程度使える者が1名いたことは否定できない。

3番目の例は1938年から1989年までに限定する必要があるが、ラフ語と呼ばれる言葉で、この言葉の使い手は、現在のチェコ共和国シレジア地方出身の優れた詩人ウンドラ・ウィソホルスキ（本名：エルビン・ゴイ）である。ラフ語はシレジア地方で話されるチェコ語とポーランド語の過渡的方言をその基礎に置くが、彼の言葉は方言に単に文字を与えたものではない。あくまでも文学、特に詩のための言葉である。ウィソホルスキのラフ語は当時のシレジ

ア・モラヴィア方言研究を踏まえた上で、文字システム、音声、文法（形態・統語）、語彙にある程度の規範を確立させた「文語」と呼べる存在であった。この点においてスロヴィンツ語やボラブ語の場合とは異なっている。さらにもう一つの違いが指摘できる。たしかにラフ語の使用者は一人であったが、しかしそれは自由にラフ語を使用できたという意味ではないことである。社会主義体制のチェコスロヴァキアでは、「分離主義」ともとらえられるラフ語による執筆活動は困難であったからで、一時期は全くその活動が出来なかった。しかし詩人は苦難を乗り越え、生涯ラフ語に忠実であり、彼のラフ語詩は少なくとも30ヶ国語に翻訳され、1970年にはノーベル文学賞候補にもなったのである。

言葉はコミュニケーションの道具という本質的機能があるので、1人のみが用いる言語というのはいかにも奇妙である。そのような状況でウィソホルスキは、なぜラフ語で詩作をする必要があったのだろうか。

第1次大戦や世界恐慌などで衰退したシレジア地方を目の当たりにしたウィソホルスキは、その疲弊は外国の資本主義が原因と考え、「内容において社会主義的、形式において民族的」を目指した当時のソ連の社会主義に傾倒する。ウィソホルスキが生まれ育った地域はチェコ側に帰属したが、地元の人間に民族としてのアイデンティティが希薄で、彼にはチェコ人としてのアイデンティティはなかった。当時ウィソホルスキは、モラヴィア・シレジア地方に住むスラヴ人はチェコ人でもポーランド人でもなく、200万の「ラフ民族」であり、その言葉は「ラフ語」であるから、ラフ語で文筆活動することは外国語に疲れたプロレタリアートに益すると考えていたのである。

1934年に社会主義礼賛というテーマも含んだ初のラフ語詩集「歌う拳」を発表し、1936年には「ラフの展望」というラフ文化を推進するための組織を結成し、活動の幅を広げた。「ラフの展望」にはヤン・ストナフスキ、ヨゼフ・シノフスキ、ユラ・ハニス他が加わり、ラフ語による詩作品や散文を発表し、ヤルミラ・サムコヴァーはラフ語辞典の作成なども進めていたが、1938年にナチスドイツが迫ってくると、その活動停止に陥った。

以降「ラフの展望」の活動家たちは、政治的な圧力もあり、執筆言語をチェコ語に変えた。この段階でラフ語の使用者はウィソホルスキただ1人になったが、彼は幸運も手伝って、ラフ語で執筆活動を継続出来たが、その舞台は故郷から遠く離れたソ連においてであった。ウィソホルスキはポーランド経由でイギリス亡命を企てたが、途中でソ連軍につかまり強制収容所に収容された。しかし社会主義礼賛、そしてアンチファシストがテーマの詩作も行っていったウィソホルスキはソ連当局から高く評価され、ドイツ語とチェコ語の教師として助教授の職が与えられ、1946年まで亡命生活を送ることになった。さらにソ連作家同盟にも加わり、ヴィクトル・シクロフスキー、アンナ・アフマートワ、ボリス・パステルナーク、マリーナ・ツヴェターエワといった名だたる文学者と交流した。

ウィソホルスキの生涯を通して、ラフ語による文学活動が最も充実したのは、1941-43年のウズベキスタン疎開時代である。タシケント、サマルカンド、ブハラなど各地でインスピレーションを受けたウィソホルスキは、1942年に約140もの詩を編み、その他の詩作とあわせてソ連で合計4冊の詩集を刊行した。その際パステルナークとツヴェターエワとの友情は詩人

Mamé

Tak ležiš v truhle tu, jak kdybys snila
tén první dlouhý sen v životě svým.
Co byl tvůj život? - Abyš užívala
nas devět dětek, si po nocach šla
a do kónzumu v Pětworldže nošila
a w horkých polach w počé mozolila.

Od tebe smy slyšeli málo slov.
U nas še eném spěvy rozléhaly,
ty smutné slónské spěvy še zbýraly
- nóm Lyso hora čelá černo w krów -
do mojej dčeckej duše še wpýjaly
a w mojej kérwi nowe spěvy hryaly.

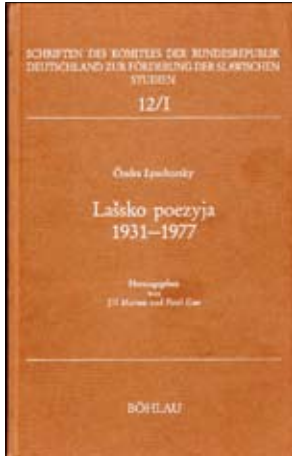
Ty ležiš w truhle. Jo začínóm spjéwac
tam, kaj si ty skónčila svoje spěvy.
Po twójich cestach wyselch pěšne zbýrač
do fabryk, bór, na Ostrawice břehy,
na pola chodím w žniwa snopy zdvihač.
Wšaj slyšim mamu, swoju mamu spjéwac.

20.7.1932

「母へ」(『ラフ詩:1931-1977』より)
この詩はツヴェターエワによってロシア語に翻訳されている

にとって特に重要で、彼らはウィソホルスキのラフ語詩のいくつかをロシア語に翻訳し、そのためにウィソホルスキの名は知られることになったという側面がある。

1946年にチェコスロヴァキアに帰国した後、ウィソホルスキは「ラフ民族」の概念は放棄したが、それでも当局からは弾圧され続け、1958年に一度ラフ語による詩集「ラフの川も海に流れてゆく」を発表したものの、以後はラフ語での文学活動は公に行えなくなった。そのため執筆言語をもう一つの母語であるドイツ語に切り替え、主に東ドイツで詩集を発表していた。



社会主義体制が終焉に近づいた1988年、ゲッティンゲン大学のパヴェル・ガン及び亡命チェコ人言語学者イジー・マルヴァンの尽力により『ラフ詩：1931-1977』がラフ語とドイツ語訳の2巻組みで刊行された。約570の詩作品はもちろんだが、ウィソホルスキのラフ語の概念と定義、ラフ語の簡潔な発音規則や文法、さらに同郷の詩人ペトル・ベズルチやイジー・マルヴァンとの文通などの巻末の資料は、どのスラヴ語文化研究者にも大変興味深い内容となっているので、興味を持たれた読者はぜひ手に取られることをお勧めする。

ベルリンの壁崩壊から約1ヵ月後、1989年12月19日に旧体制の終焉を見届けたかのようにウィソホルスキは他界し、同時にラフ語も「絶滅」した。彼の死により1つの文化が消滅したわけだが、その魂はさまざまな形で引き継がれている。死後20

『ラフ詩：1931-1977』年を経た2009年に、ポーランドの地域言語として生まれつつある「シロンスク語」の運動家アンドジェイ・ロチニョクによってウィソホルスキのデビュー詩集「歌う拳」が「シロンスク語」との対訳で出版された。また、ウィソホルスキの出身地に程近いモラヴィア地方では、2006年にヤン・コゾホルスキー氏らによって「モラヴィア語研究所」が設立され、現在地域言語としての「モラヴィア文語」の確立が模索されている。

中東欧諸国の多くがEUに加盟し、スラヴ世界でもEU主導の多言語・多文化主義がますます注目される昨今、ウィソホルスキは孤高の傑出した詩人としてだけではなく、スラヴ世界における多言語・多文化主義の偉大な先駆者の1人として再評価がなされるべきであろう。

学 界 短 信

◆ 学会カレンダー ◆

- 2010年3月4-5日 第2回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会 於ソウル
- 6月5-6日 比較経済体制学会全国大会 於大阪市立大学
- 7月8-9日 スラブ研究センター夏期国際シンポジウム
- 7月26-31日 ICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）第8回世界会議 於ストックホルム
- 8月26-28日 欧州比較経済体制学会第11回隔年大会 於タルトゥー大学（エストニア）
- 11月18-21日 AAASS第42回年次大会 於ロサンゼルス

センターのホームページ（裏表紙参照）にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。
[大須賀]

図書室だより

◆ソ連邦共産党中央委員会総会文書の収集状況◆

本誌 113 号（2008 年 5 月）で、収集開始をお知らせしました上記資料につき、マイクロフィルム 181 リール + マイクロフィッシュ 659 枚中、昨年中までに大部分の購入を済ませたことをお知らせします。残るブレジネフ末期の、1976 ～ 1981 年の文書を収録した 16 リールを購入すれば、このセットは完結します。[兎内]

◆ デジタル・コレクション「トルキスタン集成」の購入 ◆

秋山徹（スラブ社会文化論専修博士後期課程）

2009 年末、スラブ研究センター図書室は「トルキスタン集成 Turkestanskii sbornik」のデジタル版を購入した。トルキスタン集成のオリジナルはアリシエル・ナヴァイー名称ウズベキスタン国立図書館稀覯本室に収蔵され、中央アジアの自然環境、歴史、民族誌、経済、行政、地政学その他に関する大規模な文献資料コレクションである。それは全 594 巻および索引 4 巻から成り、ロシア帝国ならびに西欧諸国で刊行された書籍、雑誌および新聞からの、10000 点を超える切り抜き（書籍全体が採録されている場合も少なくない）で構成される。集成の編纂は初代トルキスタン総督 K.P. フォン・カウフマンの指示のもと 1868 年にサンクト・ペテルブルグで開始され、1888 年に一時中断されたものの 1907 年にタシケントで再開されて帝政ロシア崩壊前夜の 1916 年まで続き、ソ連時代の 1939 年にも補足がおこなわれた。

日本では既に京都大学地域研究統合情報センターが同集成の複製を所蔵している。京大のバージョンが数百枚の CD-ROM で成り立っているのに対し、今回センターで購入した新しいバージョンは、一つのハードディスクに、索引も含む全てが収録され、便利になっている。センター図書室は 2002 年に収集した「19 世紀末－20 世紀初頭の中央アジア新聞集成」（本誌 89 号（2002.5）参照）、『トルキスタン地方新聞』（Turkistan wilayatining gazeti.1870-1917. Tashkent）ならびに『トルキスタン報知』（Туркестанские ведомости.1870-1917. Tashkent）（本誌 98 号（2004.7）参照）、およびトルキスタン総督府に隣接するステップ総督府が発行した『ステップ地方新聞』（Dala walayatining gazeti.1888-1902. Omsk）（いずれもマイクロフィルム）、などを所蔵しており、今回トルキスタン集成を購入したことにより、中央アジア近代史に関する基幹史料をほぼ網羅的に所蔵することになったといえる。

便利なコレクションである。日本で所蔵されていないロシア帝政期の書籍、雑誌、新聞などに容易にアクセスできるばかりでなく、現地の図書館では破損などによって実質上閲覧不可能な記事が、集成に綺麗な状態で保存されている場合も少なくない。トルキスタン総督府の東部、天山山脈の遊牧民族クルグズの動向を中心に中央アジア近代史を研究する筆者も、これまでトルキスタン集成に幾度となく助けられた経験を持つ。なお、この資料の包括的な位置付けについては京都大学の帯谷知可「Turkestanskii Sbornik について」『中央アジアにおける共属意識とイスラムに関する歴史的研究』（1999 ～ 2001 年度科学研究費補助金基盤研究 A(2) 研究成果報告書 研究代表者：新免康、2002.3）67-88 頁と、『地域研究資料としての『トルキスタン集成』に関する総合的書誌研究』（2005 ～ 2007 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書 研究代表者：帯谷知可、2008.3）を参照されたい。

便利なだけではない、興味のつきないコレクションである。目録を手繰るだけでもいろいろな想像をかきたてられる。カウフマンは新しい植民地トルキスタンを帝国のなかで認知させるために、同地域に関する学知の集積を企図したが、この集成が、征服地域に関して様々な情報を収集し、支配地域として構築していこうとする征服者ロシア人の眼差しを反映したものであることは言うまでもない。このため、公文書館に保管されるロシア語史料のみならず、テュルク語を中心とする現地語で執筆された新聞、刊行物ならびに写本史料と併せて利用することが求められる。この意味で集成は、これ自体で完結する存在ではないが、ロシア側の視角から捉えた中央アジア世界を示す基本資料として活用され、さらに現地資料を併せて利用することにより、中央ユーラシア地域研究とロシア帝国研究が有機的に接合されることが期待される。これは、中央ユーラシア近代史のみならず、周辺諸帝国との比較を念頭に置いたロシア帝国史研究の深化にとっても大きな意味を持つだろう。トルキスタン集成は研究者の挑戦を待っている。

ウェブサイト情報

2009年10～12月までの3ヵ月間における、センターのホームページへのアクセス数(但し、gif、jpg、png等の画像形式ファイルを除く)の統計です。[山下]

	全アクセス数 (1日平均)	うち、邦語表紙 アクセス数 (1日平均)	うち、英語表紙 アクセス数 (1日平均)	国内からの アクセス数 (%)	国外からの アクセス数 (%)	不明 (%)
10月	404,407 (13,045)	13,665 (441)	2,813 (91)	113,846 (28%)	200,414 (50%)	90,147 (22%)
11月	353,210 (11,774)	12,455 (415)	2,738 (91)	117,763 (33%)	151,605 (43%)	83,842 (24%)
12月	338,913 (10,933)	12,320 (397)	2,232 (72)	114,530 (34%)	126,193 (37%)	98,190 (29%)

編集室だより

◆ スラブ・ユーラシア叢書第7巻の刊行 ◆



『ペルシア語が結んだ世界：もうひとつのユーラシア史』（森本一夫編著）が北大出版会から「スラブ・ユーラシア叢書」シリーズの一つとして刊行されました。現在では日本ではなじみの薄い国々で使われる「マイナー」な言語にすぎないペルシア語は、かつてインドを何世紀にもわたって支配したムガル帝国の正式な言語であったほど、広域にわたって通用していました。本書はそうしたペルシア語の通用で結び付けられた世界の姿を解明しようとするものです。[編集部]

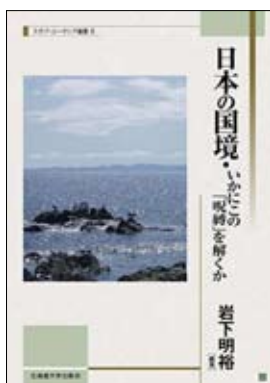
序章 森本一夫 ものを書くことから見たペルシア語文化圏：その面的把握をこえて

第1部 文献ジャンルから見たペルシア語文化圏

第1章 近藤信彰 ペルシア語詩人伝の系譜：韻文学の隆盛と伝播

- 第2章 矢島洋一 ペルシア語文化圏におけるスーフィー文献：著述言語の変遷とその意義
 第3章 磯貝健一 イスラーム法とペルシア語：前近代西トルキスタンの法曹界
第2部 地域から見たペルシア語文化圏
 第4章 菅原睦 中央アジアにおけるテュルク語文学の発展とペルシア語
 第5章 川口琢司 18世紀クリミアのオスマン語史書『諸情報の要諦』における歴史著述：ペルシア語文献からの影響を中心に
 第6章 中西竜也 清代の中国ムスリムにおけるペルシア語文化受容
 第7章 真下裕之 南アジア史におけるペルシア語文化の諸相

◆ スラブ・ユーラシア叢書第8巻の刊行 ◆



基盤研究 (A)「ユーラシア新秩序の形成」及びグローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」の成果として、日本の国境問題を網羅した『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』が北大出版会から「スラブ・ユーラシア叢書」シリーズの一つとして刊行されました。これは前著『国境・誰がこの線を引いたのか：日本とユーラシア』の続編にあたるもので、日本の問題により焦点が絞られています。本書は、ボーダースタディーズに関心をもつ専門家のみならず、国境問題にかかわる実務家や一般の読者をも対象としており、北方領土・竹島・尖閣に特化されやすいナショナリズムの「領土問題シンドローム」を克服すべく、日本の「知られざる国境問題」にも焦点をあてています。12月21日には、(エッセイ執筆陣を除く) 著者全員が一堂に会し、根室でブックトークをおこない、100人を越える市民の前で議論をおこないました。なお、本書は現在、北大博物館で開催されているグローバル COE ブース展示「知られざる北の国境」(樺太国境標石2号及び香月泰男「シベリヤ・シリーズ」の代表作「業火」の習作などの現物展示)のバックボーンともなっています。[岩下]

序章 岩下明裕 「辺境」からの問いかけ

第1部 海洋国家日本：「呪縛」との闘い

- 第1章 山田吉彦 海に広がる国境の島々
 第2章 長嶋俊介 離島と国境：行政概史と経営戦略
 第3章 黒岩幸子 北辺国境地帯「北方領土」
 第4章 原貴美恵 北方領土問題解決試案：北欧のオーランド・モデルから
 <エッセイ> 工藤信彦 国境幻想：樺太で生まれ育ったものとしての
 <エッセイ> 須藤真哉 北方領土問題の打開へ：カギ握る戦略的「四島交流」

第2部 国境イニシアチブ：「辺境」からのまなざし

- 第5章 田村慶子 国境島嶼を考える：小笠原国境シンポジウムから
 第6章 古川浩司 国境地域の挑戦：自治体主導の「国際政策」にむけて
 第7章 山上博信 「屋敷まわり」としての小笠原
 第8章 佐藤由紀 国境島嶼・小笠原の位置どりと国境意識：母島におけるアンケート調査を手がかりとして
 第9章 金成浩 オキナワ・パブリック・ディプロマシー
 あとがき 「境界研究の拠点形成」にむけて
 <詩> 工藤信彦 「国境」「領土」

◆ スラヴ研究 ◆

和文のレフェリー制学術雑誌『スラヴ研究』第57号への投稿原稿は、現在、査読結果を踏まえた修正稿が集まっており、編集委員会で再検討をおこなっております。[長縄]

会議 (2009年11～12月)

◆ センター運営委員会 ◆

2009年度第2回 12月18日

- 議題
1. 来年度以降のスラヴ研究センター共同利用・共同研究拠点運営委員会について
 2. 共同研究・共同利用公募に係わる審査について
 3. その他

◆ センター協議員会 ◆

2009年度第7回 11月4日

- 議題
1. 教員の人事について
 2. その他

2009年度第8回 12月15日

- 議題
1. 教員の人事について
 2. 特任教員（旧外国人研究員）候補者の選考について
 3. その他

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース119号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。
[岩下／大須賀]

10月31日～ 赤坂恒明（早稲田大）、家島彦一（早稲田大）、磯貝健一（京都外国語大）、小笠原

11月1日 弘幸（青山学院大）、小澤実（名古屋大）、亀田真澄（東京大・院）、草生久嗣（千葉大）、成川岳大（東京大）、橋川裕之（静岡県立大）、濱本真実（人間文化研究機構）、細川滋（香川大）、堀川徹（京都外国語大）

11月7-8日 Petr Baklanov（水・生態学研究所、ロシア）、Boris Baranov（海洋学研究所、ロシア）、Sergei Ganzei（太平洋地理学研究所、ロシア）、Evgenii Karasev（極東水文気象研究所、ロシア）、Liubov' Kondratyeva（水・生態学研究所、ロシア）、Aleksii Makhinov（水・生態学研究所、ロシア）、Nataliia Mishina（太平洋地理学研究所）、Anatoly Obzhairov（太平洋海洋学研究所、ロシア）、Sergei Prokopenko（サハリン州立大、ロシア）、Eugene Simonov（世界自然保護基金、ロシア支部）、Nikolai Vlasov（ヘルシンキ委員会）、Kirill Zharikov（海洋哺乳類研究室、ロシア）、Young, Keun Jin（韓国極地研究所）、宋男哲（黒龍江省環境保全

局環境監視センター)、笄志剛(黒龍江省社会科学院東北アジア研究所、中国)、封安全(華東師範大、中国)、劉海金(中国水産科学研究院)、閻百興(中国科学院東北地理農業生態学研究所)、艾書琴(黒龍江省社会科学院)、張風鳴(同)、牛燕平(同)、王愛新(同)、大西健夫(総合地球環境学研究所)、加藤秀弘(東京海洋大)、小林万里(東京農業大)、庄子仁(北見工業大)、白岩孝行(総合地球環境学研究所)、高木優(国際科学技術センター)、服部薫(水産総合研究センター)、花松泰倫(総合地球環境学研究所)、藤瀬良弘(日本鯨類研究所)、松田裕之(横浜国立大)、山村織生(水産総合研究センター)、宮下富夫(遠洋水産研究所)、楊宗興(東京農工大)、吉田進(環日本海経済研究所)

- 11月16日 仲津由希子(東京大・院)、山崎佳代子(ベオグラード大、セルビア)
 11月27日 本村真澄(JOGMEC)
 12月4日 Viktoriia Romanova(極東国立人文大、ロシア)
 12月7日 勝野頼彦(文科省)、豊川浩一(明治大)、三浦みどり(翻訳家)
 12月19日 Emmanuel Brunet-Jailly(ヴィクトリア大、カナダ)、Valerij Grecko(神戸大)、原貴美恵(ウォータールー大、カナダ)、Scott Harrison(カナダ)、Tomasz Kamusella(ダブリン大、アイルランド)、Anneli Kokko(ヨエンスー大、フィンランド)、Ilkka Liikanen(ヨエンスー大、フィンランド)、Martin Pratt(ダーラム大、英国)、浅羽祐樹(山口県立大)、阿部健一(京都大)、井竿富雄(山口県立大)、伊東孝之(早稲田大)、上垣彰(西南学院大)、岡野正敬(外務省)、木戸衛一(大阪大)、金成浩(琉球大)、黒岩幸子(岩手県立大)、黒川清登(JICA研究所)、佐々木史郎(国立民族学博物館)、佐藤由紀(早稲田大)、下斗米伸夫(法政大)、杉山圭以子(恵泉女学園大)、鈴木勇次(長崎ウエスレヤン大)、月村太郎(同志社大)、中澤達哉(福井大)、長嶋俊介(鹿児島大)、中野潤三(鈴鹿国際大)、名子学(文科省)、西山克典(静岡県立大)、深谷強(法務省)、古川浩司(中京大)、松田良孝(八重山毎日新聞)、三尾稔(国立民族学博物館)、三村光弘(環日本海経済研究所)、山田吉彦(東海大)
 12月20日 神長英輔(東京大)、近藤光博(日本女子大)、塩出浩之(琉球大)、杉本良男(国立民族学博物館)、富澤かな(東京大)、豊山亜希(大阪大)、中山大将(京都大)、三木理史(奈良大)
 12月24日 Jessica Allina-Pisano(オタワ大、カナダ)、André Simonyi(同)、田原史起(東京大)

◆ 研究員消息 ◆

ウルフ・ディビッド研究員は11月12～29日の間、科学研究費研究に関する国際会議出席及び資料収集のため、米国に出張。また、1月5～17日の間、科学研究費研究に関する資料収集のため、ロシアに出張。

松里公孝研究員は11月20～22日の間、北海道大学・ソウル大学シンポジウム出席のため、韓国に出張。また、12月25日～1月6日の間、グローバルCOEプログラムに関する現地調査のため、ウクライナ、モルドヴァ、プリドニエストルに出張。

岩下明裕研究員は11月20～22日の間、北海道大学・ソウル大学シンポジウム出席のため、韓国に出張。また、11月29日～12月3日の間、タルトゥー大学記念式典出席のため、エストニアに出張。また、1月9～13日の間、ユーラシアに関する日中対話出席及び資料収集のため、中国に出張。

望月哲男研究員は11月20～22日の間、北海道大学・ソウル大学シンポジウム出席のため、韓国に出張。

田畑伸一郎研究員は1月9～13日の間、ユーラシアに関する日中対話出席のため、中国に出張。

年々盛大になる忘年会（あるいはクリスマス・パーティ）（2009.12.25）



会を盛り上げてくれたのは、主に2階プロジェクト室の面々



参加者は専任教職員のほか、非常勤、プロジェクト研究員、特任、OB、院生、その家族



ビンゴで盛り上がる。当たったマトリョーシカ・カレンダーはちゃんとうちに飾ってます



左の3人は、幼いころから何度もスラ研の行事で一緒になり、すっかり親しくなった子どもたち

エッセイ

D. コウォージェイチク	われわれにウィリアム・クラークは必要か?	p. 11
長縄宣博	エンパイア・ステイトで帝国について考える	p. 16
野町素己	ひとりの詩人のひとつの言語	p. 22
秋山徹	デジタル・コレクション「トルキスタン集成」の購入	p. 25

2010年2月5日発行

編集責任 大須賀みか
編集協力 田畑伸一郎
発行者 岩下明裕
発行所 北海道大学スラブ研究センター
060-0809 札幌市北区北9条西7丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>